第103回 マイケル・サンデル「白熱教室」のスタイルを検討する

- ハーバード大のマイケル・サンデル教授「正義論」の授業のスタイル（インタラクティブな講義形式）検討
  - NHKテレビや書籍類で「白熱教室」として紹介→話題に
  - ８月６～８日に開催されたCIEC全国大会でのパネルより
- 北村の発表内容
  - 学習課題 と 授業方略　この科目の成功要因
  - 動機づけ
- その他のパネリストの先生方のご発表
  - 伊藤先生＠熊大法学部　サンデル教授の対話型授業の魅力
  - 長岡先生＠法政大学　白熱教室の課題
  - 藤本先生＠東京大学　授業を支える運営体制

©2011 北村士朗

この科目の学習課題は？

- 態度
  - 哲学的な問題について悩もうとする
- 知的技能（スキル）
  - 原理・原則に則って悩み、議論ができる
- 言語情報（知識）
  - 議論の際に過去の哲学的議論を援用できる

•これらを教条的に行わなかったことがポイント

サンデルが語る科目「Justice」の目的

- 「この講義の目的は、理性の不安を目覚めさせ、それがどこに通じるかを見ることだった。我々が少なくともそれを実行し、その不安がこの先何年も君たちを悩ませ続けるとすれば、我々はともに大きなことを成し遂げたということだ。」（第１２回－２）

•M.サンデル(2010),ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業（上）（下）,東京.早川書房

この科目の方略

受講者には
結構ハード

- 態度
  - 哲学的な問題について悩もうとする
    →悩むことの意味付け＋楽しさの体験を授業で
- 知的技能（スキル）
  - 哲学的に適切な方法で悩み・議論ができる
    →身近に感じられ、しかしオープンエンドな問い
    悩み・議論することを練習（この点については議論あり）
- 言語情報（知識）
  - 現実的な問題に関連する、過去の重要な哲学的議論を説明できる
    →Readingsとレクチャー（身近な問題との結びつけ）

だとすると、この科目はかなりハード

- 「正解無き問い」について悩み続け
- 自分の悩み方や議論の仕方の未熟さを痛いほど思い知らされ
- 膨大かつ難解なReadingsと格闘し、Webやblogを読み、少人数討議もし、
- 授業ではシンプルだが難しい質問を浴びせられ、常に自分の意見を持つことを要求され・・

行われている動機づけの例

- 世の中の議論の矛盾、先入観について疑問を呈する刺激的な問い
- 身近な例や現実の事件を題材に
- クローズド・クエスチョンで全体質問
- 説明における比喩や「たとえ話」の活用
- サンデルによるリフレイズ＝「つまり君は・・・」
- 「よく考えついたね」「面白い！」「君の名前は？」

A-2:探求心の喚起（Inquiry Arousal）

どのように探求心を刺激することができるか？

- 今まで（何となく）思っていたであろうことや世の中でなされてきた議論の矛盾、先入観について疑問を呈する刺激的な問いの連続
  - 科目冒頭の「路面電車」問題（１－１）
- 議論の中で徐々に本質へアプローチ
- 過去の哲学的「議論」を紹介
  →内容の奥深さを示す（まだ何かあるだろう･･･）
- オープンエンドにし、明確に結論は述べない（表面的には）（この点は議論に）
- 次回予告(イシューの提示）←次は何が？

•J.M.ケラー／鈴木克明(監訳).(2010).学習意欲をデザインする（ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン）.京都.(株)北大路書房
•M.サンデル(2010),ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業（上）（下）,東京.早川書房

「路面電車」問題

- 君は猛スピードで走っている路面電車の運転手で、行く手に5人の労働者がいることに気付いて電車を止めようとするが、ブレーキは効かない。
- が、脇にそれる線路待避線があることに気付く。ハンドルをきって、脇の線路に入れば、１人は殺してしまうけれども、５人は助けることができる（第１回－１）

•M.サンデル(2010),ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業（上）（下）,東京.早川書房

R-1:目的指向性（Goal Orientation）

どのように学習者のニーズに応えることができるか？

- 身近な例や現実の事件を題材に
- 学んだ成果が活かせそうな状況を想像させる
- 「自分ならどうする」と考えざるを得ない問い
  （「他人事」にさせない）

- 「哲学と聞いただけで『難しそう』なんて言わないで。
  哲学は、ごく身近な設問から深めていくことができるんです。」
- 「正義とはなにか、日常の誰にでも起こりうることの中から
  考えていきます。」

（「講義録」前書きより）

•J.M.ケラー／鈴木克明(監訳).(2010).学習意欲をデザインする（ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン）.京都.(株)北大路書房
•M.サンデル(2010),ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業（上）（下）,東京.早川書房

R-2:動機との一致（Motive Matching）

いつ、どのように、学習スタイルや個人的興味と結びつけるか

- クローズド・クエスチョンで全体質問
  →自分の意見を表明しやすい＝参加感
  「ハンドルを切ってよける人は？直進する人は？」
  （第1回－1）
- 論点を明確かつシンプルに
  ＋全体質問してから議論展開
  - 発言者以外も、議論に没入
    （「そうそう自分もそう思う」「え？そうかな？」
- 学生に意見を言う機会を与える
  - 「意見のある人は」「反論は？」

•J.M.ケラー／鈴木克明(監訳).(2010).学習意欲をデザインする（ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン）.京都.(株)北大路書房
•M.サンデル(2010),ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業（上）（下）,東京.早川書房

R-3:親しみやすさ(Familiarity)

どのようにして、学習者の経験と結びつけることができるか？

- 説明における比喩や「たとえ話」の活用
  →抽象と具体をセットで交互に提示
- 既出の内容と、現在の議論の関連付け
  →授業冒頭のイントロ、次回の予告
- 身近な例、実際に起こった事件等を題材で議論
  →「反照的均衡」へ

•J.M.ケラー／鈴木克明(監訳).(2010).学習意欲をデザインする(ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン).京都.(株)北大路書房
•M.サンデル(2010),ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業(上)(下),東京.早川書房

反照的均衡

- 個々の事例について私たちが下した判断と、それらの判断の根拠となる一般的な原理の間を行ったり来たりすること。
- 原理を見直すこともあれば、個々の事例の判断と直感を見直すこともある

（第１２回－２）

•M.サンデル(2010),ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業（上）（下）,東京.早川書房

Confidence 自信＝やればできそうだ

- C-1:学習要求（Learning Requirement）
  - 講義の冒頭（および次回予告）でテーマや目標を明示
    →どこに向かって努力するのかを意識させる
- C-2:成功の機会（Success Opportunities）
  - サンデルによるリフレイズ
    ＝「つまり君は･･･」→発言を成功させる支援
  - 基本的に何を発言されても否定されない
    ＝恥をかかない練習の機会
  - 各回授業最後の振り返り
    →「自分たちはそんな（深い）議論をしていたのか！」

•J.M.ケラー／鈴木克明(監訳).(2010).学習意欲をデザインする（ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン）.京都.(株)北大路書房
•M.サンデル(2010),ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業（上）（下）,東京.早川書房

Satisfaction 満足感＝やってよかった

S-1:内発的強化（Intrinsic reinforcement）

- 議論へ（直接・間接に）参加できたこと自体
  →Readingsを読破できたこと等への自己評価＝満足

S-2:外発的報酬（Extrinsic rewards）

- 「よく考えついたね」「面白い！」「勇気ある発言だ」
- 名前を呼ばれる
- 「この講義の目的は、理性の不安を目覚めさせ、それがどこに通じるかを見ることだった。我々が少なくともそれを実行し、その不安がこの先何年も君たちを悩ませ続けるとすれば、それは大きなことをなしえたということだ。ありがとう。」（第12回－2）

この科目が成功しているのは・・・

- 上手な動機づけが一因
- ただし、「白熱」するだけでは×
  - 学ぶべきことを学ばせる」が最重要
    - 科目のコンセプトや目的、学習課題が明確
    - その目的に向かうための道筋や方略・方法、学ぶべき内容も明確
  - サンデル教授が行っているのは、単なる「ファシリテーション」ではない！
    - それと悟られぬ巧みな誘導

伊藤先生＠熊大法学部

- サンデル教授の対話型授業の魅力
  - 思考の結果ではなく、プロセスを体験できる
  - 具体的な社会的課題に政治哲学の知識がどう役立つのかを実感できる
  - 社会的問題を自分の人生や家族、友人関係と重ね合わせて考えることができる
- 知識伝授型教育をどう改めるか
  - 対話による知識の発見・活用
  - 現実とのフィードバックをもった知識
  - 学生をどう主役に据えるか

藤本先生＠東京大学

日本の一般教育科目と違う授業運営体制

- 授業カリキュラムの構成
  - 少人数で運営する「討議クラス」と大教室の「講義」がセットになって1つの授業を構成
- 授業シラバスと読書課題の扱い
  - 各回授業で扱う文献を読書課題としてシラバスに明記
  - 書籍と論文集「リーディングス」を利用
- ティーチングアシスタント（TA）の関与度
  - ディスカッションクラスの授業など教育補佐も担当
  - 教員を目指す人の訓練機会としても機能

長岡先生@法政大

- 白熱教室の課題
  - 「予定調和的」な対話→実はハプニングなし？
  - 「ダイコトミー（二元論）」に従順？
    →他の選択肢を考えさせない（疑わせない）？
  - 「異化効果」ではなく「カタルシス（浄化）」？
    →オープンエンドなはずなのにモヤモヤしない？
- 本当の意味での自由な議論になっていない？
  - 教員と学生の固定的な関係を揺さぶり続け、新たな関係性を探っていくことが大切なのでは？